



TITLE:

報告書4: SENDスプリングスクール プログラム(インドネシア大学)2013年度(第1回)実施報告書

AUTHOR(S):

CITATION:

報告書4: SENDスプリングスクールプログラム(インドネシア大学
)2013年度(第1回)実施報告書. 2013

ISSUE DATE:

2013-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/193597>

RIGHT:

SEND スプリングスクールプログラム (インドネシア大学) 2013年度(第1回) 実施報告書

森 眞理子 (国際交流センター センター長・教授)

佐々木幸喜 (アジア研究教育ユニット [国際交流センター] 特定助教)



目 次

1. はじめに	1
2. 本プログラム設立の経緯と課題	1
3. 広報活動	2
4. 実施状況および実施体制	2
5. 派遣前講座	
健康教育と安全教育	3
語学・文化講座	4
6. インドネシア大学 スプリングスクール【3月2日～3月16日】	
研修を振り返って	5
募集要項	6
研修日程	10
参加者名簿	11
派遣学生報告	12
7. 編集後記	17



1. はじめに

平成 25（2013）年度、京都大学国際交流推進機構 国際交流センターでは SEND（Student Exchange-Nippon Discovery）プログラムとして、アジア研究教育ユニット（KUASU）との協働により、チュラロンコーン大学（タイ）とハノイ国家大学（ベトナム）への学生派遣を実施した。これら短期派遣プログラム 2 件に関する教育実践ならびに展望・課題については、『SEND サマースクールプログラム（チュラロンコーン大学／ハノイ国家大学）2013 年度（第 1 回）実施報告書』（以下、『タイ・ベトナム報告書 2013』と略）にまとめた。本報告書はその続編として、平成 26（2014）年 3 月に実施したインドネシア大学への派遣プログラムを報告するものである。

（佐々木幸喜）

2. 本プログラム設立の経緯と課題

本プログラムは、落合恵美子 文学研究科教授（KUASU 長）がインドネシア日本研究学会（2013 年 11 月／於 Dian Nuswantoro University）に基調講演者として参加した際、インドネシア大学教員との間で行った、研修に関する話し合いを素案としている。平成 25 年度の研修については、来年度以降に向けたテストケースとして実施することが会議で決定（12 月 2 日／出席者：落合恵美子 文学研究科教授〔KUASU 長〕、平田昌司 文学研究科教授〔KUASU 幹事〕、森真理子 国際交流センター長・教授〔KUASU 運営協議会委員〕、佐々木幸喜 KUASU〔国際交流センター付〕特定助教）し、語学研修と文化体験を中心とする既存プログラムの採用決定および募集要項の作成を行った（12 月 9 日）。実務は国際交流センターおよび留学生課が担当した。

募集は、日本学生支援機構（JASSO）奨学金への申請を考慮した結果、約 1 週間という非常に短いものとなったが、KUASU 関連部局（文、経済、教育、農、アジア・アフリカ地域研究研究科、経営管理大学院、人文科学研究所、東南アジア研究所）の教職員の協力もあり、研修プログラム参加者数として一つの基準となる 5 名を派遣することができた。

タイ・ベトナムへの研修も含め、来年度以降は、より多くの意欲ある学生が留学先の同年代の学生たちと交流を深め、国際的に活躍する人材として磨きをかけることができるよう、さらに質の高い SEND プログラムとしてのカリキュラム開発を目指していく。（佐々木幸喜）

3. 広報活動

1) ポスターの掲示依頼

KUASU 運営協議会にポスター・募集要項を持参し、関連部局の教職員に対して、学生等への周知に関する協力依頼を行った。また、学部生を中心とした学生が、全学共通科目の授業に出席する際に閲覧することを見込み、吉田南構内の掲示依頼も併せて行った。

依頼先：〔吉田南構内〕吉田南構内共通事務部、大学院人間・環境学研究科 大学院掛、
人間・環境学研究科総合人間学部図書館（平成 26 年度より「吉田南総合図書館」に改称）、
〔本部構内〕研究国際部 留学生課

2) 授業でのプログラム紹介・募集要項配布

事前取得推奨科目（『タイ・ベトナム報告書 2013』3 頁参照）「日本語・日本文化演習」（全学共通科目拡大科目群／カルチャー一般科目）の授業後、受講学生に配布した。

3) ホームページおよび SNS への掲載

国際交流センターならびに KUASU の HP 掲載による周知に努めた。併せて、京都大学国際交流推進機構の Facebook ページに掲載した。

4. 実施状況および実施体制

実施状況

	内容	期間	応募者数	参加者数	JASSO 奨学金
インドネシア大学	インドネシア語学習、 文化講義、文化体験	3月2日～ 3月16日 (2週間)	5名	<u>5名</u> ※ (航空券代支給3名)	3名

※ 参加学生の内、文学研究科社会学研究室在籍の大学院生2名については、落合恵美子 文学研究科教授(KUASU 長)の裁量により、「文部科学省 卓越した大学院拠点形成支援補助金」の支援を受けて派遣した。この2名は、本プログラム実施の1週間前である2月25日に渡航し、フィールド調査を中心とする研究活動を行った。

実施体制

(敬称略)

●インドネシア大学

担当職員：

Assistant Manager of Marketing
Manager of BIPA Program
Assistant Manager of BIPA Program

Tantriana WIDYANINGSIH
Dwi PUSPITORINI
Leli DWIRIKA

●京都大学

実施責任者：

学生担当理事・副学長
国際交流推進機構長・教授
国際交流センター長・教授

赤松 明彦 (Akihiko AKAMATSU)
森 純一 (Junichi MORI)
森 眞理子 (Mariko MORI)

担当教職員：

アジア研究教育ユニット・特定助教
(国際交流センター付)
研究国際部留学生課 教育支援掛

佐々木 幸喜 (Yuki SASAKI)
金見 順子 (Yoriko KANAMI)

5. 派遣前講座

ここでは、派遣前に行った取り組み「健康教育と安全教育」「語学・文化講座」について記す。なお、危機管理体制の整備の一環として、先行プログラム（タイ・ベトナム）と同様、緊急連絡網を作成し受け入れ大学と共有している。

健康教育と安全教育

国際交流センターの医師を中心に、学生が健康上の問題を抱えることなく海外短期留学プログラムに安全に参加できるように、事前に講義を中心とした取り組みを行った。本取り組みは、①留学前の安全及び健康に関する事前教育、②出発前の自記式質問紙を用いた健康調査、③健康上にリスクがありケアが必要と判断された学生に対する医師面接、の3点からなる。なお、帰国後にも②と③と同様の、健康調査と医師面接を実施した。

講義では、健康に関する内容と安全に関する内容を実施した。一般的に、海外留学や研修中に起こり得るリスクは、安全面のリスク、メンタルヘルスを含む健康面のリスク、医療システムの相違、の4つに分類される。本取り組みでは、健康に関する講義を「健康とメンタルヘルスに関する講義」として、安全に関する講義を「安全教育」として2回に分けて実施した。安全教育では、留学中に起こり得る事故や災難、対応について説明し、海外で直面する様々なリスクについて改めて注意を喚起した。特に今回は、東南アジアで蚊が媒介するウイルス性疾患であるデング熱が流行しているだけに、風土病について強調して説明した。



① 出発前の安全及び健康に関する事前教育

「健康とメンタルヘルスに関する講義」「安全教育」

1月8日（水）12:10-12:50 国際交流センター 多目的ホール

身体面のリスク 渡航前の準備 海外での健康管理	<ul style="list-style-type: none">・持病のある人は、紹介状を作成してもらうこと・固有の風土病—デング熱、チクングニア熱、寄生虫—について・下痢が生じた場合の対応について・病院の受診の仕方、救急時の対応
精神面のリスク メンタルヘルス	<ul style="list-style-type: none">・短期の滞在で罹患しやすい疾患の特徴・それらの疾患症状と、予防法について・仲間の重要性・禁止薬物には近づかないこと
安全面のリスク 被害者になるリスク	<ul style="list-style-type: none">・渡航先の治安、健康に関する情報をHPから事前に手に入れておくこと・外務省作成のビデオ「海外安全劇場」を供覧し、留意すべき点を再確認する・事故や事件に遭った場合の緊急連絡先・海外旅行保険の重要性
加害者になるリスク	<ul style="list-style-type: none">・日本人がしばしば巻き込まれる事例の紹介・注意すべき行動について確認

② 自記式質問紙を用いた健康調査

出発前のオリエンテーションの時間に、自記式の質問紙を配布し、記入を依頼した。留学後についても、同様に質問紙を配布し、帰国してから記入するよう依頼した。日本語版 GHQ60 (General Health Questionnaire; 日本文化科学社) を用いて、その時点での精神的な健康状態を調査することと、現病歴・既往歴の有無について確認するのが主な目的である。さらに、滞在先での適応度を予測するためにストレスコーピングなどの行動スタイルも併せて調査した。質問紙は、本人の同意を得て留学生課を通して回収した。

③ 医師面接

面接が適当と判断された学生には、留学前に医師による健康指導を行うことにしている。今回、高リスクのケースは特に認められず、主に予防医療学的な指導を行った。

今回の健康・安全教育の主な目的は、留学を無事終えることである。加えて、今回の学習を、自分の健康を省みる一つの機会としてとらえてほしいと願っている。「自分自身を知ること」は、健康管理の第一歩であり、学生自身が自らの健康の傾向を知ることは、これからの長い人生において貴重な体験になるものと考えられる。今回の教育を通じて、「健康と安全は与えられるものではなく、まずは自分自身で守るべき」という高い意識を持つと同時に、今後、周囲の健康と安全に関しても、十分な配慮ができる人材に育ててほしいと願っている。

(国際交流センター 准教授 阪上 優)

(医学研究科精神医学 研究員〔前 国際交流センター 助教〕 川岸久也)

語学・文化講座



2月27日(木)に、有志のインドネシア人留学生(日本語・日本文化研修留学生)による語学・文化講座を国際交流セミナーハウス「j.Pod」にて行った。本講座では、インドネシアの風土や慣習、挨拶表現について学んだ。欠席した学生については、他の学生が講座内容をまとめたノートを見せ、情報共有に努める場面も見られた。

成果と課題

「健康教育と安全教育」については、すべての派遣学生に出席を義務づけた。受講態度は良好であった。また、国際交流推進機構(国際交流センター・国際企画連携部門)が実施する他プログラムと同様、海外旅行保険の加入を義務づけた。補償内容としては「治療・救援費用 無制限」プランに設定されたものを選択した。

「語学・文化講座」については、調査研究のために2月25日からインドネシアに渡航していた文学研究科の大学院生2名、体調不良を訴えていた学部生1名を除く、学部生2名とプログラムを引率した佐々木が出席した。今年度は有志の留学生に講師を依頼したが、来年度以降は謝金を支払ってチューターとして雇用する、あるいは研究科・研究所の開講講義への参加許可を打診するなど、派遣前の学習として、より体系的な取り組みを視野に入れる必要があると考える。(佐々木幸喜)

6. インドネシア大学スプリングスクール

研修を振り返って

1) 研修内容

インドネシア大学での初めての研修となった今回、インドネシア語習得、文化理解を重視した2週間の研修を実施した。派遣学生は人文学部（FIB：Fakultas Ilmu Pengetahuan Budaya）に併設するLBI（Lembaga Bahasa Internasional；the Institute of International Languages）で研修を受けた。以下、語学講座、教室活動それぞれの概要を説明する。

語学講座として、LBIが開講する、外国人を対象としたインドネシア語コースであるBIPA Program（Bahasa Indonesia untuk Penutur Asing Program；Indonesian for Non-native Speakers Program）を受講した。全20回（1コマ100分）行われた本授業では、テキスト1冊*が主教材として使用され、「読む、書く、話す、聞く」の四技能を総合的に養成するための体系的な実践が行われた。授業は主にインドネシア語による直接法で行われ、挨拶表現や日常会話といった実用的なものから文法（語形変化や時制）など継続学習を想定したものまで、多岐に亘る内容が取り上げられた。

教室活動は、京大生のみを対象とした文化講義・文化体験が4回ずつ組まれた。文化講義（1コマ100分）は学内他部局の教員が担当され、社会学や経済学、言語学に関する概説を学んだ。文化体験（1コマ120分）では、竹を用いた楽器群である「Arumba」の演奏方法を学んだ。

一方、BIPA Programとは別の試みとして実地研修、学生間交流も行った。実地研修としてボロドゥル寺院遺跡群、プランバナナ寺院遺跡群を参拝し、建築様式や歴史、文化について実地に学んだ。学生間交流として、Siti Dahsian Anwar（Vice Dean, Graduate School of Multidisciplinary Studies）、Himawan Pratama（Researcher, Center for Japanese Studies）両氏の計らいで、人文学部日本学科の1・2年次の学生（約30人）との交流の時間を設けることができた。

※使用テキスト

（教室にて使用）Dwi Puspitorini 《PILAR BAHASA INDONESIA UNTUK PEMULA》（2007）

（自学用の教材）Dwi Puspitorini, Sri Handayani Yasa 《EVERYDAY INDONESIAN Practical Daily Guide Beginner 1》（2013）

2) 成果と課題

語学講座、教室活動での取り組みは、インドネシア文化理解に対して積極性を持つ大きな契機となったようである。とりわけ、文化講義では、インドネシアやASEAN諸国のみならずアジア全体を取り巻く問題が取り上げられ、学生が「世界と繋がる自分」を意識するきっかけとなったように思われる。実際、授業でのテーマを十分に理解するため、授業終了後も積極的に質問を行う学生の姿も多く見られた。

実地研修の日時、場所については、担当教員と学生との間で話し合いを行った。学生の自発的な態度を尊重することに努めたが、安全管理の観点から、土地勘のない場所での単独行動を慎むこと、集合時間を厳守することなど、最低限の取り決めは設けた。来年度以降は、インドネシアをはじめとするASEAN諸国をより深く知ることができるよう、教室活動と実地研修とを関連づけたカリキュラム開発を行っていきたいと考えている。

学生間交流も短時間ではあったが、学生が互いの考えを知るための大変重要な機会となった。来年度以降は、SENDプログラムとして日本研究センターや日本学科との共同教育を計画しており、その布石ともなった。関係教員との密な連携を行うため、また、派遣学生が支障なく研修を行うため、来年度以降も引率者（教員や研究員）が同行し、調整に当たる必要がある。

（佐々木幸喜）

SEND プログラム

2014 年インドネシア大学スプリングスクールプログラムのご案内

【日程】

- ・ 3月2日（日） 大学（デポック市）到着
- ・ 3月3日（月）
 ↳ インドネシア語・文化講座、文化体験
 3月14日（金）
- ・ 3月15日（土） 自由行動
- ・ 3月16日（日） 帰国

【詳細】

- ・ 募集人数：5名程度
- ・ 募集対象：京都大学に在籍する学部生・大学院生
 （大学院生については、文学研究科、教育学研究科、経済学研究科、
 農学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科に所属する者を優先する）
- ・ 募集条件：異文化体験・学習に高い意識を持つ者

・ 費用詳細

\$ 1=102.16円 / Rp 1=0.01円 (2013年12月現在)
--

学費：\$ 788（約81,000円）

航空チケット代：約100,000円

宿泊費：\$ 26.4×13日＝\$ 343（約36,000円）※大学内のゲストハウス

諸費用（国内移動費・その他）：約30,000円～50,000円

※この中には、入国時の「滞在査証発給手数料」（\$ 25.00）、

出国時の「空港税」（Rp 150.000 [約1,500円]）が含まれます。

海外旅行保険 [全員必須]：約13,000円 ※AIU海外旅行保険「インフィニティ・プラン」に加入すること
 （治療・救済費用無制限に設定）

・ 奨学金

条件を満たした学生には、以下のとおり補助が出る場合があります。

ただし、参加決定後に取消す場合はキャンセル料が発生します。

航空チケット代補助（50,000 円）：5 名程度

JASSO 奨学金（70,000 円）：日本国籍を有する者、または日本への永住が許可されている者

前年度の成績評価係数が 2.30 以上、かつ収入が限度額未満の者

【申し込み】

- ・ 申請書類：①応募申請書（書式 1-2、短期派遣・単位取得免除プログラム）
 ②語学力証明書（書式 3、英語に関する記入のみで可）
 ③語学試験（英語）を受験済みであればそのスコアコピー（提出自由）
 ④申請にあたっての抱負（書式自由、A4 用紙 1 枚程度）
 ⑤成績証明書（締切時に提出できない場合はその旨を申し出ること）
 ⑥パスポートの顔写真ページ写し（未取得者はその旨を申し出、早急に取得すること）

⑦収入に関する証明書

(JASSO 奨学金申請者のみ。条件については、応募申請書「書式 1-2」3 頁を参照のこと)

給与所得者・・・源泉徴収票のコピー (税込み)

給与所得以外・・・①確定申告を確定申告書の持参・郵送により行った場合

確定申告書 (第一表と第二表) (控) の写し (税務署の受付印があるもの)

※税務署の受付印がないものは、加えて市区町村役場発行の「所得証明書」(有料) が必要

②確定申告を電子申告により行った場合

申告内容確認表の写し (受信通知又は即時通知を添付)

学部生については世帯の年収 (給与所得世帯 908 万円未満、給与所得以外の世帯 422 万円未満) の証明書、

大学院生については本人および配偶者の収入 (修士課程 486 万円以下、博士課程 553 万円以下) の証明書を提出してください。

この奨学金を受給する学生は、帰国後に留学の学習成果に関する報告書の提出が義務づけられています。報告書が提出されない場合、もしくは不備がある場合、一旦支給された奨学金の全額返却が求められる場合もありますので注意してください。

※申請書類等は、以下の京都大学国際交流センターホームページ、
アジア研究教育ユニット (KUASU) ホームページからもダウンロード可能です。

<http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/>

<http://www.kuasuu.cpiet.kyoto-u.ac.jp/application/application-procedures/>

- ・申請書提出先：研究国際部留学生課教育支援掛 派遣プログラム担当 075-753-5679
(吉田国際交流会館地下 1 階 国際連携企画部門 事務室)
- ・締切：2013 年 12 月 19 日 (木) 12 時 00 分
- ・選考：選考は書類審査および面接により行います。
面接は 12 月 19 日 (木) もしくは 20 日 (金) の 16 時 30 分～18 時 00 分に
京都大学国際交流センター内で行います。
- ・最終結果通知：12 月 24 日 (火)

- ・本件照会先：
国際交流センター 森 真理子 sasaki.yuki.8n@kyoto-u.ac.jp
佐々木幸喜
研究国際部留学生課教育支援掛 金見 順子 kanami.yoriko.7n@kyoto-u.ac.jp

【スケジュール】

- ・最終結果通知：12 月 24 日 (火)
- ・参加者オリエンテーション：12 月 26 日 (木) 12 時 10 分～13 時 00 分
- ・ヘルスケア講義：2014 年 1 月上旬の 12 時 10 分～13 時 00 分 (予定)

※オリエンテーションおよびヘルスケア講義は出席必須です。

ヘルスケア講義の日時・場所は追って連絡します。

参加できない学生は本プログラムには参加できません。

【備考】

- ・参加人数が 5 名に満たない場合、プログラムが中止になることがあります。
- ・本プログラムは、国際交流推進機構 国際交流センター提供の全学共通科目「日本語・日本文化演習」
(後期：火曜 2 限) を受講した上での参加を推奨しています。
- ・本プログラム参加決定者については渡航前に、教員による語学力証明書 (書式 3 と同一) の提出を求めます。
- ・本プログラムには引率者 1 名が同行予定です (一部日程)。
- ・本プログラムに参加しても、京都大学の単位になるわけではありません。
- ・参加者全員に治療・救援費用無制限の AIU 海外旅行保険「インフィニティ・プラン」への加入を義務づけます。





研修日程

月 日 (曜)	時 間	日 程
3月 2日 (日)	12:00～17:05	出発 (関西国際空港～スカルノハッタ国際空港／GA889)
		外貨両替、宿舎チェックイン
3月 3日 (月)	09:00～10:40	Indonesian Language (1)
	11:00～12:40	Indonesian Language (2)
	14:00～15:40	Economics
3月 4日 (火)	09:00～10:40	Indonesian Language (3)
	11:00～12:40	Indonesian Language (4)
	14:00～15:40	Economics
3月 5日 (水)	09:00～10:40	Indonesian Language (5)
	11:00～12:40	Indonesian Language (6)
	15:00～17:00	Arumba
3月 6日 (木)	09:00～10:40	Indonesian Language (7)
	11:00～12:40	Indonesian Language (8)
	14:00～15:40	Indonesian Language (9)
3月 7日 (金)	09:00～10:40	Indonesian Language (10)
	11:00～12:40	Indonesian Language (11)
	15:00～17:00	Arumba
3月 8日 (土)	終日	自由行動
3月 9日 (日)	終日	自由行動
3月10日 (月)	09:00～10:40	Sociology
	11:00～12:40	Sociology
	14:00～15:40	Indonesian Language (12)
3月11日 (火)	09:00～10:40	Indonesian Language (13)
	11:00～12:40	Indonesian Language (14)
	14:00～15:40	Indonesian Language (15)
3月12日 (水)	09:00～10:40	Linguistics、Culture
	11:00～12:40	Linguistics、Culture
	15:00～17:00	Arumba
	18:00～22:00	学生交流
3月13日 (木)	09:00～10:40	Indonesian Language (16)
	11:00～12:40	Indonesian Language (17)
	14:00～15:40	Indonesian Language (18)
3月14日 (金)	09:00～10:40	Indonesian Language (19)
	11:00～12:40	Indonesian Language (20)
	14:00～16:00	Arumba
	16:00～17:30	修了式
3月15日 (土)	終日	自由行動
3月16日 (日)	01:00～09:55	出発 (スカルノハッタ国際空港～関西国際空港／GA888)

参加者名簿

	番号	氏 名	所属	学年
副班長	1	井上 翔太 (Shota INOUE)	総合人間	B1
	2	武田 萌 (Moe TAKEDA)	教育	B1
班長	3	中山 平祐 (Heisuke NAKAYAMA)	総合人間	B5
	4	前田 雅彦 (Masahiko MAETA)	文	M2
	5	許 燕華 (Yanhua XU)	文	D3

井上 翔太（Shota INOUE）

総合人間学部 1 回生

今回のプログラムでは、インドネシア語の、特に日常会話において使用する機会の多い表現を集中して学習しました。放課後には実際に店舗で値段を尋ねたり、自己紹介をするなど、ある程度の会話をすることもできました。それに加え、決まりきったフレーズに限らず文法や理論方面のことも学習しました。具体的には接頭語・接尾語をつけることによる単語の活用、品詞変化についてです。これにより文構造の理解を深めることができました。この活用の話は私のこれから大学で学びたいものの一つであり、実際にもっとも興味をもって聞くことのできたものでした。また、何人かの先生は媒介語をほとんど使わずにインドネシア語を教える、直接法で講義をしてくださいました。このような指導法を受けたのは初めてであり、外国語教育における方法の一つとして興味深いものでした。

講義は単に語学にとどまらず、経済学や社会学、文化に関するものも行われました。日本でインドネシアについての講義を受けるのとは違い、生のインドネシア人の考え方を反映した講義を受けられたことは有意義でした。これによりインドネシアそのものの理解・関心が高まりました。



学内では、日本に興味を持ち、日本語を学習している学生たちとも交流しました。交流の時や学内では、ムスリムの女性と話をする機会を多く持つことができました。彼女たちはヒジャブと呼ばれる被り物をしていて、外見的特徴が顕著です。私はプログラム参加前にはこのような人たちと会ったことがなかったため、彼らのことを“得体のしれない人”と感じていたところがありました。しかし交流を通じて、彼らと様々なことを話し、彼らとて私たちと何ら変わることなく自らの望む学問を学ぶ人たちだとわかりました。その結果、このような考え＝偏見を自分が持っていたことに気づき、なおかつそれを捨てることができたように思います。

また、放課後に何度かジャカルタ都市部へ出かけ、モールやモスクなどを訪れる機会がありました。街に出て思ったのは、きらびやかで巨大な建物が発展の象徴のように街中にいくつも見られる反面、視点を少し下に移すと整備の行き届いていない地面や、多くの屋台があるという光景に対する違和感です。この二つの景色は明確に場所分けされているわけではなく、同時に同じ場所^{いびつ}に存在し、混ざり合っているのです。この光景にやや歪なものであるという印象を抱きました。

そもそもこのプログラムに志願した理由および目標は、語学教育や言語学を現場で体験することでした。インドネシア大学での講義を通して、外国人たる我々に対しての教授法を、身をもって体験でき、改めて自分の、言語、とくにその構造や活用に対する関心を確認できたと思います。このプログラムへの参加によって、自らの進みたい進路の、プログラム参加前よりもはっきりした形が見えました。



このプログラムは、今まで海外旅行や留学をしたことのない私にとって初めての海外経験でした。私は、このプログラムの中で、他国の文化を知ることや自国の文化を知ることの意味を自分の言葉で語る材料になるような経験を積み、異文化・異言語教育について考えるきっかけを得ることを目標としていました。

衛生面、食べ物の味、時間通りに物事が進まないことなど、はじめのうちは自分をその文化に無理やり合わせようとしてストレスを感じました。頭では違いを理解して行ったつもりなのに、それでもストレスを感じてしまう自分にも驚きました。しかし、その文化の中で生活し、慣れてくるにしたがって、自分をその文化の中におしこめるのではなく、自分らしく生活できるようになってきて、生活を楽しめるようになってきました。

一番印象的だったのは、多様性の受容です。インドネシアでは多くの民族・宗教・言語が混在しているということを、身を以て知りました。学生や町の人と話して印象的だったのは、「その人が何を信じているかはその人の心の中の問題だから、私は気にしない」という言葉です。これがすべてとは思いませんが、私にとって面白い考え方でした。違う文化や言語を持った民族同士が宗教も違うのに一つにまとまることができるのは何故だろう、ということは、今後も注目して考えていきたいです。



プログラムでは、インドネシア語を一から教わりました。ゼロからのスタートではありましたが、大学や町でインドネシア語に触れ続けることで、自分を表現できる部分が増えてきました。そして、最低限の言語知識があれば、後は伝えたいことと意思があればコミュニケーションはとれるということを知りました。しかし、それと同時に言語を思い通りに操れる重要性も感じました。インドネシア

語とジェスチャーだけでは、「私を表現できない」ことが多いのです。インドネシア人の友達に自分の正確な気持ちを伝えたいときなどは、英語のほうがすらすら口から出てきてしまうことがあり、自分でも驚きました。インドネシア大学の日本学科の学生と交流する機会があったのですが、日本語においてでも自分のキャラクターを発揮し、違う言語文化の中で生きる人とも自分を持ちながら分かり合えるスキルを持ち、いきいきと私たちと話してくれる彼女らを見てかっこいいと感じました。

プログラムを終えて、二つのことを感じました。一つは、言語や文化を知ることの前に大切なことが存在するということです。自分の考えを持つこと、他人と意思疎通するとはどういうことか知ることなどは、相手の言語や文化を知らなくても鍛えられることかもしれません。もう一つは、先程のことと矛盾しますが、言語や文化の重要性です。自分のことを正確に伝えたり相手を正確に知るためには、ツールとしての言語に精通することや、考え方の違いを文化としてあらかじめ知っておくことが大切なのだ強く感じました。今後、教育制度の中での異文化教育について考える際は、ツールや表面的な文化を教えることに留まらず、その目的を意識した扱い方をしていこうと思いました。

本プログラムに応募した理由の発端は、経済的ポテンシャルが注目されがちなインドネシアについて、その背後にある文化・思想を、インドネシア語学習を通じて就職前に学んでおきたいと考えたことにあります。その上で、以下の二点を本プログラムの目標として設定しました。一つ目としてインドネシア語の基礎知識をマスターすること。そして二つ目として現地の人々との交流を通じてインドネシアについての理解を深めることです。

達成度を振り返る前に、まずは本プログラムの研修内容の概略を述べたいと思います。プログラムはインドネシア語学習（計 32 時間）とインドネシアに関する経済・文化などの講義（計 16 時間）から成り立っていました。インドネシア語学習はゼロからのスタートであったのでアルファベットの読み方から始まりましたが、最終的には旅行中に使うようなフレーズをいくつも習得することができました。またインドネシアに関する経済・文化などの講義は、まず先生によるレクチャーが行われ、その後に質問を募集し議論をするという形式のものでした。質問の時間は盛り上がり、インドネシアを理解するうえでの疑問点を解消するのに役立ちました。

目標の達成度として、一点目のインドネシア語の基礎知識については授業で習った内容についてすべて消化できました。授業後の復習や現地の人と積極的にインドネシア語を使ってコミュニケーションを図ろうとすることによって 2 週間という短期間の学びの成果を最大化することができたと考えています。二点目についてですが、インドネシアに関する講義や現地の日本学科の学生との交流を通じて、限られた範囲ではありましたが交流を達成することができました。私がインドネシアに関する疑問点をぶつけると常に好意的に対応をしてくれ、とても有意義な交流ができたのではないかと考えています。

プログラム中に印象的だったこととして、まず「インドネシア語は言語のサラダである」という現地の先生の言葉を挙げたいと思います。歴史的に様々な国の影響下にあったインドネシアでは、その名残をインドネシア語の中にも多く残しています。単語や発音には、マレー、西欧、アラブ、中国などの影響が随所に見られました。他国からの影響を寛容に受け入れ、それを言語として保存し、アイデンティティにする。その柔軟さは、国是である「多様性の中の統一」を表していると感じました。つぎに現地の学生との交流もとても印象的なものでした。彼らは日本から来た私たちにとても好意的に接してくれました。日本製品の普及や



ポップカルチャーの流行がそれを後押ししていることを差し引いても、インドネシア人の「他者」に対する寛容さは特筆すべきものがあると感じました。その柔軟な態度は、多様性の上に成り立つインドネシアにおいて、常に自分とは異質なものと共存しなければならない環境から得られた資質なのかもしれません。彼らが持つ「他者」に対する寛容さは、グローバル化に伴う国際理解の態度について大いに参考となるべきものだと感じました。



研修に参加するにあたっての私の目標は、インドネシア語を基礎的なレベルで理解できるようになること、なるべく多くの現地の人々と交流しその文化や考えを理解すること、またこれらの体験を通して日本という自らの足場を捉え返すことでした。

インドネシア大学（以下 UI）におけるプログラムでは、語学の講義、インドネシアの経済・社会・文化に関する講義、そして伝統音楽を演奏する時間があり、これらの講義を 2 週間受講しました。このうち語学の講義中と放課後には、UI の日本学科の学生とインドネシア語と英語を使って交流する機会がありました。

このうち研修期間中もっとも印象的だったのは、学生を含めたインドネシアの人々との出会いでした。彼・彼女らは顔を合わせるといつも微笑み、道を訊ねると親切に案内してくれました。観光地に行っても、一般的に外国人にはかなりしつこい場合が多いのですが、インドネシアでは一度こちらが断るとそれ以上は勧誘せず、いろいろ情報を教えてくれること



もありました。以前インドに行ったとき商売の勧誘を断るのにかなり苦労し消耗した経験があったので、これには驚き、こちらの人々は穏やかだなという印象を持ちました。また語学や文化の講義を通して、インドネシア文化は非常に折衷的なものであるということを知りました。インドネシア語はルーツにアラビア語、サンスクリット語、旧宗主国であったオランダ語、そしてジャワ語など現地語起源のものが組み合わされたもので、それによって形成された文化にも、ヒンドゥー、イスラーム、仏教、キリスト教など様々な層が重なった折衷が見られます。このように穏やかでありつつ、外の世界に対して開放的で、それをうまく取り入れている人々であるという印象を受けました。またこの点と関連して記憶に残っているのは、UI の経済学の教授に日本の原発輸出について意見を伺ったことでした。私が原発事故当時国の人間として日本の性急な輸出政策に懸念を表明すると、彼は、原発は最善の発電方法ではないものの発展途上のインドネシアにとっては必要であると、経済成長や原発に対して楽観的な見方をされていました。各国には様々な事情があり発言の可否を簡単に評価することはできませんが、日本の論調との違いを感じ、他方でまた日本への強い信頼を感じました。述べてきたような、インドネシアの人々の人の良さや、折衷性の文化ゆえの選択なのかもしれません。

以上の経験を通して、インドネシアの文化について以前には全く気づいていなかった要素に気づくことができ、インドネシア語も基本的な部分を勉強することができました。語学に関しては今後も学習を継続し、また今回の滞在で得た経験を、自らの中で咀嚼し、今後の研究や仕事に活かしていきたいと考えています。



今回のプログラムでは調査研究のため、他の派遣学生よりも一週間長い三週間、インドネシアに滞在しました。最初の一週間はジャカルタ市内と周辺を回り、他の皆さんと合流した後の二週間はインドネシア大学で語学と文化・経済・社会の勉強をしました。

ジャカルタ市内ではまさに近代化の真最中で、高層ビルと昔ながらの家屋が混在していました。また色々なところに立派なショッピングモールがあり、モールのなかには日本、韓国、欧米、台湾の店も多くみられました。基本的に貧富差は激しく、月 2、3 万円が平均月収である庶民には手が届かない商品が多く、インドネシア大学の学生曰くウィンドウショッピングする人が集まる場所になっているようでした。

今のジャカルタの姿をみた後は、オールドカマーとニューカマーの中国系の人たちが居住するところにも行きました。オールドカマーの人たちのところでは、1830 年にできた祖先と神を祀る中国式の「廟」も拝観しました。彼らはほとんど中国語を話せず、見た目もインドネシア人に近くなっていました。インドネシア人と結婚する人も多く、キリスト教を信仰する人と結婚した場合、キリスト教に改宗する人も多いようです。宗教を変える一つの要因は葬儀が簡素なことにあると言われたことが非常に興味深かったです。「廟」には家で祀っていた神の像、孔子の像もありましたが、それらはまさに宗教を変えるとき家から持ってきたもののようです。



ニューカマーたちが居住しているのはジャカルタ市内で、中国語を話せる人も多く、2000 年以降は中国人が建てた小中学校もでき、また現在大きい中華街的モールが建設中だという話もしてくれました。

インドネシア大学では毎日 3 時間～4 時間半くらいインドネシア語を勉強し、またインドネシアの文化、経済、社会の勉強もしました。初めて接するまったく知らない言語の勉強はワクワク感と緊張感が交差していましたが、勉強したものをその日に使えるので非常に楽しく感じました。言語以外の授業はインドネシアの概況に対する説明で分かりやすかったのですが、教室だけではなく外で生のインドネシアの文化、経済、社会に接しながらの授業であればと感じた部分もあります。

今回のインドネシア滞在はアジアの広さと多様性を、身を以って感じた三週間でした。まったくゼロから勉強したインドネシア語の面白さはもちろん、自分の足で回ってみたチャイナタウン、圧縮されたジャカルタの都市は非常に印象深いもので、今後の自分の研究と視野の拡大にとって非常に有意義なものでした。

最後になりましたが、このような機会をくださった方々、またインドネシアで案内をしてくださった文学研究科社会学研究室の中村昇平様に心から感謝を申し上げます。



ASEAN 諸国における SEND プログラムは平成 25（2013）年度から始まりました。多くの方々のご支援の下、3 月 16 日（日）のインドネシア大学スプリングスクール参加者の帰国をもって、今年度の一連のプログラムを無事終了することができました。本プログラムの実施にあたって、ご教示くださった全ての方々に、心から感謝申し上げます。

サマースクールプログラムとして実施したタイ・ベトナム研修 2 件も含め、このプログラムに参加した京都大学の学生は、所属や学年、また、海外渡航歴は様々でしたが、自国とは異なる文化に身を置き、自分とは違う見方や考え方が幾通りもあることを実感し共有したという点で、実りある経験となったと確信しています。研修を終えた学生たちが、他者に対する寛容の態度を忘れることなく、今回のプログラムで養った観察眼を、あらゆる場で生かしてくれること、またそれを多くの人と共有してくれることを強く願っています。

今年度における SEND プログラムの成果をより広く知っていただくため、実施報告書をまとめました。本報告書が、学生派遣を考えておられる諸先生方の一助として、少しでもお役に立つことができれば幸いです。

（佐々木幸喜）

SEND スプリングスクールプログラム（インドネシア大学）

2013 年度（第 1 回）実施報告書

平成 26（2014）年 3 月発行

編集・発行 京都大学国際交流推進機構 国際交流センター
京都大学アジア研究教育ユニット（KUASU）

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

電話（075）753-5678

印刷・製本 ㈱ 田中プリント

電話（075）343-0006

